

## ゲーテの詩『植物の変態』について

—その成立史を中心とした覚え書き—

国 分 義 司

「もうずっと前から、寂しい山岳や固い岩石の観察から、私を連れもどきたいと思っていた私の女友達にとっては、私の抽象的な庭師の仕事にもけって満足しなかった。彼女たちにとって、植物とか花とかは、形、色、匂いによって記載されるべきものであったのに、論文『植物変態論』を見ると、それらは消えうせて、亡霊のようなシェーマのように見えたのである。そこで私は、日頃から好意を寄せてくれる婦人たちを、一編のエレジーによって惹きつけてやろうと考えた……

……この詩を、いちばん喜んでくれたのが、本当の恋人であった。彼女は、この詩に出てくる、世にも愛らしいさまざまな植物の形象が、自分自身に関するものであると主張することができた。私も非常に幸福であった。いきいきとした譬喩が、私たちの美しい完全な愛情を高め完成してくれたからである。」<sup>(1)</sup>

これはゲーテが1970年に完成した『植物変態論』〔Versuch die Metamorphose der Pflanzen zu erklären〕を『植物の変態』〔Die Metamorphose der Pflanzen〕という名の一編の詩の形にすることをもちろんだいきさつを書いたものである。しかし冒頭に引用した『印刷物の宿命』〔Schicksal der Druckschrift〕の中で作者が語っている単純な意図の他にも、その成立にあたってゲーテが直面した種々の問題があるのは当然であるが、まず上に掲げた文でゲーテ自身が指摘している当時の恋人であり、後の妻であるクリスチアーネとの関係に注目しなければならない。

クリスチアーネの名をあげるとき、これと対比して必ずといっていいほどシュタイン夫人の名もあげられる。しかし必ずしもゲーテのクリスチアーネとの突然の出会いが、ゲーテからシュタイン夫人を遠ざけたわけではない。イタリア旅行中の1786年頃から、ゲーテにとってシュタイン夫人との関係はすでに重荷になっていたことが知られている。それでも旅行中は詳細な旅日記を夫人宛に送り続けていたので、ゲーテから見れば彼女と縁を切ることを望んでいたわけではなかったのだろう。

1788年6月18日にイタリアから帰国したとき、ゲーテは周囲の人々から冷たく迎えられたばかりでなく、シュタイン夫人との関係ももとのようには親密には行かなくなっていた。同年の7月13日にクリスチアーネを家に迎えるようになり、1789年3月はじめ、このクリスチアーネとの良心にもとづく結婚生活がシュタイン夫人に知れる頃はすでに、クリスチアーネはゲーテにとって良き伴侶であった。そればかりでなく彼女は終生、ゲーテの植物学研究の有能な助手であり、植物養育に努める確かな庭師であり、植物界の美しさと豊かさを本当に喜ぶことができる感性の持主でもあった。同年の5月始め、シュタイン夫人がゲーテに詰問の手紙を残して旅に出てしまい、6月1日と8日の最終的な決裂の手紙をゲーテが送ったこと、シュタイン夫人がこれに返事を書かなかったことや、12月にはクリスチアーネとの間に長男のアウグストが誕生したことなどが、この関係を次第に周囲に認知させることになった。やがて1792年8月12日のゲーテのフランクフルト訪問の際、母からもクリスチアーネへの好意ある贈物を贈られたことによって、これまで必ずしも好意的でなかったゲーテ家の家族の一員として迎え入れられるようになる。こうなると冷えきっていたシュタイン夫人との関係も1794年8月には次第に解消され、夫人との文通が再開されることになった。1797年8月にはゲーテがクリスチアーネと息子を伴ってフランクフルトの母を訪問し、彼等と母とが初めて面会することになったが、この詩『植物の変態』の成立年は1798年6月であるので、ゲーテの二

人の女性との関係においては、クリスチアーネの場合は母との問題が解決し、シュタイン夫人の場合は、彼女が身を引いたことによって、生活の上でも完全に落ち着いた時に書かれた事になる。

詩型のエレギー (Elegie) もまた、ゲーテにとってはそれに相応しいものであった。ゲーテのエレギーの多くは、内容的には一般に解されるような「哀歌」とか「悲歌」ではなく、一種の叙情的な恋愛詩である。この詩も冒頭の引用にあるように愛の讃歌である。しかも完成しきった愛のけれんみのない讃歌であることは、次にあげるこの詩の最後の数行を見てもあきらかであろう。

おお 想いおこすのだ、私たちにあっても 出会いという芽から  
やさしい交わりがしだいにはぐくまれ、  
たがいの胸の内より友情が力強く立ち現われ、  
そしてアモールのように、ついに花と実を生み出したのだ。

.....

きみもこの今日を歎びたまえ / 神聖な愛は  
同じ想い 同じものの見方から生れる至高の結実への到達に努める、  
調和しあう観照のなかで二つの存在が伴侶として結ばれ  
より高い世界を見いだすために。(2)

成立史の諸問題を検討するためにはまた、この詩の概略を知る必要がある。全編は80行から成り、そのうち中ほどの約3分の2を占める約50行が、植物の一生、すなわち種子から果実に至るまでの一サイクルを表出している。韻律や詩句の吟味をせずにその部分を意識すると次のようになる。

植物は種子から展開する。それを育む大地の静けさの胎内からやさしくこの世に解き放たれるとすぐに。永遠に活動する聖なる光の魅力に、萌え出づる子葉の繊細なたたずまいを委ねるとすぐに。その力は種子のなかに眠っていた。始まりつつある本来の姿は、自身のなかに閉ざされて、種皮

のなかで身をかがめて、葉と根と芽は半ば形造られて、まだ色を欠いていた。静かな生命の核はこうして乾いたまま見守られて保たれ、努力しつつ、おだやかな湿りに身を委せつつ、前へ前へと伸びゆき、やがて時がくると、まわりを囲む闇夜から身もち上げる。しかし始めに現れた姿はあまりにも簡単である。それでもその子供は、植物の姿を表わしている。その後すぐに次の衝動が、身を起しながら、節の上に節を重ねながら、始めの形姿を絶えず新たに変えてゆく。たしかにそれは同じものではない。いろいろの形が生みだされ、次に続く葉は、ますます拡がり、ギザギザをつけ、それまでは、たたみこまれてより低い器官のなかに休んでいた先端と途中に枝分かれして、伸びてゆく。こうして葉は、さしあたり最も確かな完成に到達する。しかしながら自然は、ここで力強い両手でその形成を止め、それをより完全なものへとおだやかに導く。こんどは自然は樹液を控え目にする、脈管はせばまり、その姿はただちに、より可憐な様相を呈する。葉の末端に働く衝動が静かに身をひそめると、柄の葉脈がより完全に形成する。しかしより可憐な茎が葉をつけずにずっと伸びあがると、あるふしぎな姿が見るものの目を惹く。こんどは丸く環になって、数えられはするが無数に、小さめの萼葉が互いに並び合う。秘めたる萼が身を決して軸のまわりに密集すると、色美しい王冠を解き放して、至上の姿に身を変え、美しい冠をあらわにする。交替し変化する葉の列がしなやかにそよぐあいだから伸びた茎の先で花が動く。色うるわしい花びらはやがて神の手を感知してすみやかにしぼみ、雄蕊と雌蕊、このこよなく優しい形をしたものたちが、定めのままに結ばれようとつとめあう。するとたちまち数知れぬ胚珠がひとつずつふくらみ、果実のふところに優しくつつみこまれる。

これは明らかに『植物変態論』の内容そのものである。このことはとりもなおさずゲーテがこの植物学の研究成果に誇りを持っていたことを示すばかりでなく、それにもかかわらずその成果の評価が得られないばかりか、素人学者として非難されてきたふんまんを、逆手に取る手段としても

創得意慾を高めたかも知れない。少なくともこの詩の内容は、作者の自然科学研究について、その業績の程度に関心を持たせるに充分のものがある。

イタリアから帰国後まもなく論文『植物変態論』に着手しているの、この詩が出来上がるまで、約10年が経過している。帰国直後からのゲーテの自然科学研究史については、さしあたりゲーテの自然科学に関する著述と、それに関する主な出来ごとを年代順に羅列するだけで、彼の自然科学への関心の深さが自ずと知れる。

1788年6月に帰国後まもなくローダー教授が解剖学に関する著書中にゲーテは顎間骨発見を公表する。1790年1月、『植物変態論』脱稿。3月、ヴェネチアの古画の研究中光学に関心を寄せ、ニュートンの光学説は誤謬であるとの確信に達する。4月、リドー海岸で発見した動物の屍骸から、頭蓋骨は脊椎骨から発生したものと推論するに至る『動物の形態に関する試論』に着手。8月、プレスラウその他の鉱山業視察。10月、光学の研究及びローダー教授の筋肉学の講義を受講。1791年5月頃、光学に関する新学説『光学への寄与、第一』発表。1792年6月、『光学への寄与、第二』、9月頃、『一般比較論の試み』。1793年、論文『主観と客観との媒介としての実験』、1794年1月、イェナに「ワイマル公国植物学研究所」設立、7月、同研究所での会合の帰途、シラーと「原植物」について長時間の議論。夏、論文『色彩論の要素を発見する試み』。1795年1月、ローダー教授の靱帯学の講義を受講。自然科学者アレクサンダー・フォン・フンボルトを知る、『骨学より出発せる比較解剖学総序論の第一草案』。8月、イルメナウ鉱山見学。1796年8月、蝶の成長と生態を観察。1792年2月、昆虫の変態についての研究。1798年1月、色彩論とその歴史についての著述に着手。詩『植物の変態』脱稿。1799年5月、水星の太陽面通過を観察。10月、シェリングの『自然哲学体系の草案』読書を機に自然哲学的思索に興味を持つ。

上に見るように、1788年から1799年までは、その間にゲーテの身边には

政治的、軍事的な諸問題が数多く発生し、各地への公的な旅行などにも煩わされたにもかかわらず、ゲーテの生涯でもその自然科学上の研究やそれに関する著述がきわめて多い時期であった。そして特に1790年の『植物変態論』の脱稿のころは、ゲーテは明らかに自然科学者として学会にデビューしたいと真剣に考えていたらしいし、自説が学会で認められないことで憤りを感じていた時期もあるが、その後このエレギーが成立するころには次第に落ち着きを取り戻し、むしろ「形態学」の創案、及び自然哲学や自然科学研究とそこから得た知識を詩的に高めることに関心を移し始めている。したがって、自然研究の内容を論文とは別の形で表現することが出来るのではないかという心の余裕がこの詩を世に送る契機となったことも確かであろう。

エレギー『植物の変態』が初めて印刷に付せられたのは、F. シラー (Friedrich Schiller) の主宰する雑誌『年刊詩集』〔Musenalmanach〕1799年号においてである。ゲーテのシラーとの初めての出会いは、シラーに激しい愛を寄せ、後にジャン・パウルと親しくなったシャルロッテ・フォン・カルプ夫人の仲介で1798年9月7日におこなわれる。1790年10月30日にはゲーテは自らシラーを訪ね、はじめて親しく話し合う。その後1794年5月24日のゲーテのシラーへの最初の手紙をきっかけに、お互いの手紙のやり取りや、シラー編集の月間文芸雑誌『ホーレン』〔Horen〕への協力などを通して交際が活発になるが、同年7月のシラーとの「原植物」についての議論の後に、二人の友情は急速に深化し、1795年1月、『ホーレン』誌に、ロマン主義者たちへの警句詩集『クセーニエン』〔Xenien〕の協同製作に専念するに至る。その他、両者はドイツ模範劇場の確立にも努力し、このころから二人の協力によりイェナはドイツ古典主義文学の中心地となり、同時に後期ドイツ観念論哲学及びロマン派文芸の発祥地となる。

いわゆるゲーテ、シラー同盟がゲーテに与えた影響は、彼の詩のなかに

イデーを強調するシラーの影響が色濃くにじみ出ることになり、その結果青年時代のゲーテの文学の基本をなすもの、即ち自由、素朴、ロマン性などが影を潜めたことである。それが結果的にはドイツ古典主義文学の確立に資することになる。しかしこの場合の古典主義は、主として古代の創造精神を認識することであり、そのために充実した内容を盛る器を古代から借りることであって、決して古典を擬似るのでもなく、形式主義を標ぼうすることではなかった。従って、古代ギリシアにその起源をもつ古典的なエレギーの形式を用いたこと、即ちダクテュルス（揚抑抑脚）よりなるヘクサメータ〔Hexameter〕（6歩句）と、同じくダクテュルス（揚抑抑脚）よりなるペンタメータ〔Pentameter〕（5歩句）が結合したデステヒオン〔Distichon〕（二行詩）の形をとったことは、ゲーテはこの詩に彼の古代観、古典文学に対する当時の考えかたを入れようとしたと見なければならぬ。

シラーのイデーを通してゲーテのなかに定着しつつあった彼の当時の古代観は、彼の青春時代の溢れるばかりの自由な感情を、より崇高な形式のなかで抑制し、その純粋さを完成された普遍性にまで高めようと意図したことであった。そこでは当然、これまではなし得なかった学問の成果の文学作品への投入という課題がゲーテに課せられる。1798年9月14日のカール・クリスティアン・アドルフ・ノエマンに宛た次の手紙で、ゲーテはこの考えを明確にしている。

いつのころか私は植物の変態の理念を、詩的に読める形に直して、さらに拮げて行きたいと考えるようになり、私は今その試みをしています。リンネは学問にとって何が有効であり得るかという点で、詩人も名乗るというリベラルさを持っていました。私はこの素晴らしい意図をしくじらないよう願っています。<sup>(8)</sup>

さらに翌99年1月22日のクネーベルに宛た次の手紙では、クネーベルが翻訳したギリシアの教訓詩人ルクレツの詩の贈呈を受けた礼状のなかで次

のように記している。

私がこの本を通読しながら、いろいろのことを思い浮べました。というのは昨夏以来しばしば現代における自然詩の可能性について考慮してきたからであります。植物の変態についての小さな試み以来、私は幾度も励まされてきました。あなたのルクレツの翻訳が完成されたら、私にとってもますます興味深いものとなるでしょう。古代が現代の基本として存在するようになるでしょうから。(4)

また1798年6月18日の日記でも、次のように記している。

午後フィヒテ教授のもとで過ぐす。夕方シラー訪問。詩による自然学の叙述の可能性について語りあう。(5)

さらに99年10月4日の日記では、

夕方シラー訪問。自然哲学について、その詩による叙述について語りあう。(6)

このエレギーは、たしかにこの試みのひとつになっている。しかし一時的には興味を持ったものの、教訓詩はゲーテにとって必ずしもなじまなかったし、結果的には恋愛詩の域を越えるものにはならなかった。また、この詩が書かれた1798年ごろ、ゲーテは比較的多くのエレギーと同じくヘクサメータとペンタメータのデステヒョンによるエピグラム (Epigramme) の作品を書いているが、この傾向は1800年を過ぎると完全に中止される。つまりエレギーもエピグラムもこの時代、つまり『植物変態論』と『植物の変態』の間の時期に限られている。いずれにせよこのエレギーの成立には、ゲーテのワイマル到着以来次第に発酵しつつあったギリシャ古代の文学への投入が、シラーとの交流によってある確かな方向を示されるようにはなったが、ゲーテが本来意図したようなものに成熟するには、まだ時を待たねばならなかった。

冒頭に掲げたこの詩が出来るまでの経過を記した文の前後には次の様な



記述がある。

「……どこでも学問と詩が結び付けられるということ、学問が詩から発展するものだという事は、認められようとしなかったし、時代の展開にしたがってこれら二つのものが、お互いに親しく双方の側の利益のためにより高い場で、またこころよく出会うことが出来るかもしれないということとは、考慮されなかった……

.....

……このエレジーには、ここでひとつの場所が恵まれたかもしれないが、そこでは、それが学問的な表出との関連で、ひとつの成り行きの中に差し込まれたより優しくより情熱的な詩歌よりも、一層理解しやすくなるであろう」。(7)

この文は、1820年に発表された『形態学のために I』〔Zur Morphologie I〕に収められている。それより先の1800年にこの詩は『新詩集』〔Neue Schriften〕に収められた折に幾らかの改訂が行なわれたが、その後は改作されないまま、次には1827年に、詩集『神と世界』の中に登場する。ここでは内容は全く替えられていないものの、新たに作られた詩『動物の変態』など自然学に関する他の4編の詩とともに再編されて、意図的に一つのみとまりのある世界を創造している。構成は『パラバーゼ』〔Parabase〕、『植物の変態』、『エピレマ』〔Epirrhema〕、『動物の変態』、『アンテピレマ』〔Antepirrema〕の順になっている。パラバーゼ、エピレマ、アンテピレマはそれぞれ、古代ギリシアのアッティカの喜劇のなかで、合唱指揮者が観客に向かって一節ごとにおこなわれた主観的な語りかけで、多くは劇の進行とは直接に関係のない一種の間奏曲に似たものである。最後の『アンテピレマ』は1818年に書かれた自然哲学論文『省察と忍従』〔Bedenken und Ergebung〕の末尾に置かれたものと同一のもので、ここでは学問研究に於いては理念と成果の間には、常に越え難い間隙があり、それを埋めるには詩の介在が必要があるとしている。この詩句は、これより先に『ファウ

スト』〔Faust〕の第一部（1922-27行）にも掲載されたものである。三編の内容はおおよそ、自然は絶えず生成、変生しつつ永遠であり、自然の万象は内に秘めるものを外に見せ、その縦横の關係の妙に我々の目は奪われる、というようなものである。

ここにおいてゲーテは、学問と詩の統一を目指した詩『植物の変態』の一応の安住の地を見い出したように見える。というのは、ゲーテの場合常にそうであるような、満身に達しない時の改作がここで終わっているからである。しかし学問と詩の真の出会い、すなわち「これら二つのものより高い場での出会い」は個々の詩においてより、研究の成果自体が詩として把握される作品、例えば彼の「形態学」全体においてなされることになるか、もしくはひとつひとつに学問の成果が積み重ねられて、全体として大きなポエジーとなっている彼の後年に完成する大作、すなわち『ファウスト』や『マイスター』においてなされることになるであろう。『植物変態論』の詩化への試みはそこに至る一課程に過ぎない。

テキスト：GOETHE WERKE, Hamburgerausgabe in 14 Bänden,  
Christian Wegner Verlag 1962. Bd. 1.

引用文献：(1) GOETHE WERKE, Hamburgerausgabe Bd. 13 S. 107  
L. 15～.

(2) Bd. 1 S. 201 L. 71～.

(3) GOETHE BRIEFE, Hamburgerausgabe Bd. 2 S. 359  
L. 11～.

(4) 同上 S. 365 L. 25～.

(5) GOETHE BEGEGNUNGEN UND GESPRÄCHE, Walter  
de Gruyter Berlin-New York, 1980 S. 430 L. 4.

(6) 同上 S. 528 L. 32.

(7) GOETHE WERKE, Hamburgerausgabe Bd. 13 S. 107  
L. 8～.

(1986年7月15日 受理)